

屋の外に出て見たりした。

しかしうっかりするとあぶなくて不可ない。

まだ歸りたがつてゐる様子なのだ。

僕は強權の繪葉書を女に讀ませて、

「之はあなたにあてゝ書いたのだ」と偽つたりした。

「あなたは僕と、結婚しても好いと言つたらう、それなのに僕の言ふ事を拒む道理はないだらう

寒いから僕はもう休むからあなたもねよう」

女はつつ立つたまゝ倒顛した心を、頭の髪の毛から爪先まで、上下に猿機械の如く通はせてゐたに違ひない。

敷布團が一つしかない敷つ放しの床の中へ女を押し伏して、僕は襦袢とコシマキ丈になつてねた。

上布團を着せようとすると、女は起き上つて床を抜け出る。

僕はみだらな肉に對する念はかすれてゐたので、只女が僕とヒツツイてねてくれる丈で満足す